

植物+α 第74回 万博公園の木の実と鳥+民族学博物館

2017.11.21(火) 9:30~15:00

日本野鳥の会大阪支部

平 軍二(g-hira@nifty.com)



万博公園は平が植物と鳥の関係を知った探鳥地、ここでの観察結果は、大阪支部会報むくどり通信に「**植物と鳥の歳時記**」として92.9~98.11の6年間、連載しました。液果が色づくのは鳥に食べ頃になったことを知らせる合図、鳥に食べられて種子をあちこちにばら撒いて欲しいという植物側の戦略です。北国からきた冬鳥たちが、植物の戦略に乗っかり公園内の液果を食べ、ここで越冬します。今日はそのような鳥たちになったつもりで、液果を試食したいと思っています。**少なくとも10種の木の実**を試食したいと思っていますので、ご協力お願いします。

1. 万博公園の植生変化



1975.1.7



1985.5.23



2012.9.26

①航空写真による変化

インターネットで国土地理院より航空写真を公開されています。万博公園周辺の1975年、1985年、2012年を並べてみました。

1975年(左上図) 万博が終わって5年、日本庭園は万博開催時に植えられた木々は緑色になっています。自然文化園は西大路より北側に緑が若干見えますが、南側はまだ植栽工事中のようです。

1985年(左中図) 万博探鳥会をスタートした年です。樹木の背が低く、草原が多く、**キジが園内を縦横に**移動していました。

上の写真より10年経過、西大路より北側は良く樹が育っているが、南側は後に「**花の丘**」となる所の緑がまばらです。土壌が悪く樹が育たなかったため、コスモス畑(花の丘)に改変したと聞いています。

2012年(左下図) 木々が育ち、すばらしい樹林に変化しています。その状況は今日、確認していただきます。

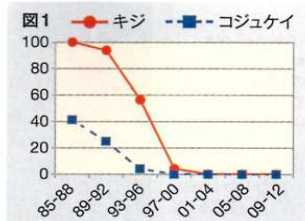
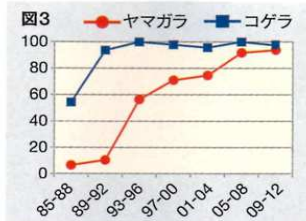
②今昔写真による変化

撮影年月は確認していませんが、植樹直後と現在の状況写真です。

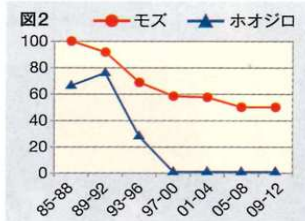


提供：大阪府万博公園事務所

2. 万博公園探鳥会でわかったこと(野鳥誌2015.2~3月号)



1985年2月から続けている万博公園探鳥会。30年間の総参加者は、のべ27,500人。観察した鳥は119種にのぼる



※横軸は年を、縦軸は観察頻度を表す
※観察頻度(%) = 4年間の観察回数 / 4年間の探鳥会回数



キジ (写真/天筒晴島)

万博公園探鳥会・30年間の観察でわかったこと

万博公園で定例探鳥会を始めてから、今年の2月で30年を迎える大阪支部からのレポートをご紹介します。

日本野鳥の会評議員・大阪支部副支部長

平軍二

いつの間にかキジがいなくなった

日本万国博覧会記念公園(以下、万博公園)は、1970年に開催された日本万国博覧会(大阪万博)の跡地を整備して生まれた。大阪支部が万博探鳥会を開始したのは85年、万博公園が開園してから10年

あまりのことで、キジは公園のシンボル鳥とされるほど、いつでもどこでも観察できる鳥であった。

万博公園でキジが繁殖し始めた経緯はわかっていないが、探鳥会をスタートした頃の万博公園はキジの全盛期で、繁殖期には一度の探鳥会で50回もオスの雄叫びを聞いたこともあった。また、西部劇の

シーンを思わせるような、太陽の塔をバックに争うオス2羽や、人が往來する遊歩道のすぐ近くの草むらで抱卵するメス、背中にアリを這わせる、いわゆる「蟻浴」のキジを見たこともあった。

そのキジが徐々に観察しにくくなり、探鳥会では98年4月を最後

に姿を消してしまった。

万博探鳥会を始めて満20年が経った2005年、記念誌を作るにあたり、85〜04年までの20年間の探鳥会データを、4年ごとの観察頻度図(図1〜5)にまとめてみた。

92年頃まではほぼ毎月観察できたキジが、2000年以降はまったく記録がないことがはっきりした。しかもキジだけでなく、草原を好むホオジロ・コジュケイが減り、モズも冬鳥としての観察のみとなるなど、キジ同様の経過となっていた。今回の報告に際し、最近のデータ(2005〜12年)を追加して28年間としたが、図1・2の通り草原の鳥は回復していない。

草原の鳥に代わり林の鳥が増え、オオタカが繁殖

草原の鳥に代わって増えたのは林の鳥だ。80年代にほとんどいなかったヤマガラが繁殖し、コゲラも冬鳥から留鳥になり、一年中観察できるようになった(図3)。また冬鳥も

ジョウビタキ・ルリビタキの観察頻

度がアップした(図4)。

そして里山の象徴とされているオオタカは、冬鳥としての観察が増えていたが、2007年から園内で繁殖し、その後もほぼ毎年子育てをするようになっていく。

繁殖し始めたにもかかわらず、オオタカの観察頻度が図5にあるように冬鳥のハイタカとほぼ同じ40〜50%であるのは、オオタカの巣が常緑樹林の中にあり、繁殖中も昼間は声を出すことが少なく、探鳥会時に確認できないことによる。

万博公園でオオタカの繁殖・子育てが続いているのは、以下のような理由が考えられる。

- ① 越冬していたオオタカが、人工林の生長で営巣できる場所と判断したこと
- ② 探鳥会では、オオタカがカラスに追われている光景をよく観察したが、実際にはカラスを餌にしており、餌資源が充分あること
- ③ 最大の天敵である人に対しては、遊歩道から見つけにくい常緑樹林の中に巣を作っている上、繁殖期には万博公園事務所により立入禁止区域が設定されること

万博公園の自然遷移

私は当初、キジが減っている原因は公園管理のしすぎにあると思っていた。そこで、90年頃から公園

残念ながら、現在、オオタカは万博で繁殖していません ↑

3. 試食する木の实

今回、色のついた液果だけでなく、乾果を含め、鳥になった気持ちで試食予定の木の实は以下の通りです。



4. その他の木の実



アオキ



アラカシ



アレチヌスピトハギ



イヌシデ



イヌホオズキ



ウバメガシ



カクレミノ



カツラ



カナメモチ



キリ



クヌギ



クロガネモチ



クロマツ



シナサワグミ



シラカシ



シロヤマブキ



ススキ



スダジイ



センダン



タチバナモドキ



タラヨウ



タンキリマメ



トベラ



ナワシログミ



ナンキンハゼ



ハゼノキ



ハンノキ



ヒサカキ



メタセコイア



ラクウショウ

5. 植物と鳥の歳時記

植物と鳥の歳時記 (93年1月号)

第3回

平 軍 二

万博公園の冬

5. アキニレ(秋楡) ニレ科

花季：9月 鳥季：10月～2月

“キリリ・コロロ”と飛び回っていた多数のカワラヒワ。どんな鳥が出てくれるか不安に思いながら開始した第1回目の万博探鳥会(1985年2月)では、初めて探鳥会に参加した人に、カワラヒワの姿を強く印象づけた。それから8年、寒風にも負けず飛び回るカワラヒワは、万博公園の冬の風物詩として探鳥会を盛り上げているが、この鳥が集まっている所がアキニレの木である。

万博公園には数百本のアキニレが植えられているが、9月下旬に葉腋(葉の付け根)に、淡黄色の目立たない花が咲き、10月中旬には黄緑色で軍配形の翼果を持つ実が無数につくと、早くもカワラヒワが試食に来ている。

アキニレの実の軍配の中央には、直径1ミリにも満たない小さな種子があり、食べてみると、柔らかく粘り気(デンプン質?)が出るので、『実が大きければ人間も食べることが出来るかも』とは筆者の独り合点である。

枯れ葉と同じ色になったアキニレの実に、本格的に鳥が集まり始めるのは、冬鳥が次々に到着する12月。アトリ科のカワラヒワ、アトリ、イカル、コイカル、シメ、そしてなんとマヒワも！ またアトリ科以外では、スズメがこの実の大ファンである。特に、カワラ

ヒワ、アトリ、スズメの3種は、一緒に100～200羽の大集団を作り、アキニレからアキニレへと飛び回っている所を観察出来る。

2月に入りアキニレの実が木から落ちると、この集団は、地上に落ちている実を探してアキニレの木の下に集まり、人が近づくと一斉に飛び立って、近くの木に集団で移動する。そして3月、アキニレの実が無くなると、園内を飛び回る鳥が急激に減少し、寂しさを感じるくらいである。

尚、大阪府鳥類目録('87年11月発行)のコイカルの写真(塩田さん撮影)では、左側のオスはアキニレ、右側のメスはカエデ(前号に記載)の実を食べている。

6. ハルニレ(春楡) ニレ科

花季：3月 鳥季：4月

アキニレより葉が大きく葉脈が目立つハルニレは、葉の出る前の3月下旬頃に萌葱色の花が咲き、4月にはアキニレに似た軍配形で黄緑色の実が群がってつく特徴がある。

北国生まれのハルニレは、札幌の街路樹として有名であるが、万博公園にアキニレほど多く植えられていないこと、実のなる季節が桜花に目移りする4月のため、今まであまり観察しておらず、アキニレと同じように鳥が集まる木であることを知ったのは、ここ2～3年のことです。

しかし、餌の端境期であり、アキニレに代わる食物源として万博公園に残っていたアトリ科の鳥達に珍重されており、カワラヒワ、イカル、コイカル、アトリ、シメなどがハルニレの実を食べているところを観察している。

(植物と鳥の歳時記)

日本野鳥の会大阪支部会報の「むくどり通信101号～138号'92.9～'98.11」に、万博公園で観察される鳥と樹木の間を「歳時記」として連載したもの

(掲載植物種 47種)